H27. 2. 14

急性心筋梗塞直後の心室細動

Dr. 和の町医者日記

「生と死」シリーズ⑧

90分間蘇生処置後に後遺症なく復帰

今日は「生」と「死」の境を90分間もさまよいながら、後遺症なく社会復帰された人を紹介します。正確には90分間、完全に死んでいたのですが、奇跡的に生き返った人に出会った私の経験です。

数年前のことです。その夜、1日の仕事を終えてラーメンを流し込み、休日夜間診療所の当直に出ました。午後10時の夜診開始時には珍しく患者さんがゼロ。しかし、10分後に私と同年齢の男性がさえない顔をしてフラフラと診察室に入って来られました。問診票には「胸が苦しい」と書いてある。椅子に座って「どうされましたか？」と質問すると「さっきから胸が苦しくて…」と答えたところで失神しました。

慌てて身体を支えましたが、白目をむいて呼吸が止まっている！ つまり、いきなりの心肺停止状態です。

おそらく、急性心筋梗塞を起こしながらなんとか歩いて到着したものの、私の前に座った途端に心室細動という致死性不整脈が出たのでしょう。考える間もなく、気管内挿管を行い心臓マッサージなどの蘇生処置を開始しました。

蘇生処置を続けながら、自動体外式除細動器（AED）のスイッチを何度も押しましたが、救急隊が到着するまでの15分間は心拍は再開しないまま。同乗した救急車内でも救急隊員と一緒に心肺蘇生を続けましたが、それでも無理です。20分かけて大学病院の救急センターに到着し、10人くらいの救急救命チームにバトンタッチして必死の心肺蘇生処置が続きました。

粘り強く処置を続けたところ、45分後に小さな心電図波形が出始めました。それでも、少し心臓マッサージの手を離すとすぐに心電図がフラットになるので、まだ心拍再開とはいえません。果たして、60分後に心拍が再開しました。ただ、停止から90分も経過していたので、仮に一命をとりとめても植物状態ないし脳死コースかと思われました。奥さんに「万一、退院できたら連絡下さい」と名刺を渡して再び救急車に乗って帰り、翌朝まで当直業務を続けました。

その2週間後。午前の診療が終わる頃、小さな菓子折りを持った夫妻が当院の受付にあいさつにみえられました。私と同年齢、同体格、そして似た顔をしたあの日の男性でした。ああ、あの後、生き返ったのだ！ 心拍が再開して、そのままカテーテルで処置をして、夜のうちに自発呼吸も再開して抜管できたと教えてくれました。男性は、バツが悪そうにはにかみながらも、禁煙を約束してくれました。不思議なご縁を互いに喜びあいました。

もちろん、救命チームが蘇生を諦めなかったことが勝因ですが、到着までの35分間の私の処置も貢献したはず。30年前、2年ほど救急医療の現場にいた経験が役に立ちました。先日、心肺停止から後遺症なく蘇生した日本記録が82分間だと新聞に載っていましたが、この患者さんの心肺停止時間は90分以上でした。たとえ90分間心肺停止しても蘇生に成功し、後遺症なく社会復帰している例があり、諦めたらダメだということを教えられました。いつも死ぬ話ばかり書いていますが、たまには人を生き返らせています（笑）。

21日午後9～11時10分、フジテレビ系で、本邦初の、死に関する特集番組が放映されます。全国民に見てほしい内容です。ぜひ録画もしてください。

82分の日本記録 心筋梗塞で心停止した愛媛県西予市の61歳の男性が運ばれた市立八幡浜総合病院（同県八幡浜市）で、82分後に再び心臓が動き始め、愛媛大学病院（同県東温市）での「低体温療法」で約1週間後に意識を取り戻した例が国内最長時間として報道されている。

長尾和宏（ながお・かずひろ）
東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。平成7年、尼崎市で「長尾クリニック」を開業。外来診療から在宅医療まで〝人を診る〟総合診療を目指す。医学博士。近著「平穏死・10の条件」「胃ろうという選択、しない選択」はいずれもベストセラー。関西国際大学、東京医科大学客員教授。56歳。

ひょうご